

SCG062-14

会場:国際会議室

時間:5月27日 15:30-15:45

ひずみ集中帯の「近世以降の地震活動に関する観測記録等の収集と解析」の中間成果報告

The midterm report of the systematic historical earthquake study along the west coast of the Sea of Japan.

松浦 律子^{1*}, 古村 美津子¹, 関根 真弓¹, 岩佐 幸治¹, 鈴木 保典¹

Ritsuko S. Matsu'ura^{1*}, Mitsuko Furumura¹, Mayumi Sekine¹, Koji Iwasa¹, Yasunori Suzuki¹

¹ 地震予知総合研究振興会

¹ADEP

ひずみ集中帯に発生する地震像を明らかにするため、我々は、江戸時代以降明治・大正・昭和・平成に発生したこの地域の地震に関する資料を収集・解析し、長期評価の精度向上に役立つよう、地震活動の履歴を詳細に検討してきた。糸魚川-静岡構造線までの主として東北～北信越地域の日本海東縁側のひずみ集中帯では、江戸時代以降でも50個近い被害地震が知られており、地震被害への配慮が必要な地域である。現在半分以上の地震について解析ができた。この地域では海岸沿いに隆起痕跡が見られるが、地震は必ずしも東傾斜で陸側隆起のものだけが発生する訳ではない。奥尻島、飛島、粟島などに関しても島の隆起を起こす断層面をもつ地震だけが発生している訳ではない。一般に内陸の被害地震は再来間隔が数千年以上である場合が多いが、男鹿半島では1810年と1939年に震源が同じではないものの、M6.8～6.9とほぼ同規模の地震が発生している。ひずみ集中帯の変形は、二つの男鹿地震のように、東西方向には限られた幅の中にM6.8～7程度の地震が複数発生して、全体として $V_p=6\text{km/s}$ 層が東西方向に縮むことによって、表面の大きい変形分が地下でも賄われているのではないだろうか。

このように考えると、断層面の傾斜方向は二通り考える必要があるが、ひずみ集中帯の中での一連のM7程度の既知の震源域分布から、この地域で次に地震被害に注意すべき場所を従来よりは絞り込んでいけるだろう。

本研究は文部科学省からの委託研究によって実施されました。

キーワード: ひずみ集中帯, 歴史地震, 男鹿地震

Keywords: the concentrated deformation zone, historical earthquake, Oga earthquake